



中尊寺付近の居龍跡寺院跡の風景(岩手県平泉町) 〓芭蕉庵ドットコム提供

新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集2『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

奥の細道

松尾芭蕉

古典の日

十二 平泉



三代の榮耀一睡の中に、大門の跡ハ一里こなたに有。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川南部より流る、大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。康衡等が旧跡は、衣が関を隔て南部口をさしかため、夷をふせぐと見えたり。扱も義臣すづつて此城に籠り、功名一時の草村となる。国破れて山河あり、城春にして草青ミたりと、笠打敷て時のうつるまでなみだを落し侍りぬ。

夏艸や兵共が夢の跡

夏艸や兵共が夢の跡
卵花に兼房みゆる白毛かな 曾良
兼て耳驚したる二堂開帳す。経堂ハ三将の像を残し、光堂ハ三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて玉の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既積廃空虚の草村となるべきを、四面新に開て、薨を覆て風雨を凌、暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降残してや光堂

つわものどもへの鎮魂

芭蕉と曾良が念願の地平泉にたどりついたのは、松島を出てから三日目の五月十三日(陽暦六月二十九日)だった。旅の苦勞をかきわけてついにこの北辺の故地にまでやってきた甲斐があった。三代の榮耀一睡の中に、だしぬけに始まるこの一章は、詩人芭蕉のこの地の歴史によせる感動にうめられていて、松島の章にもましてひびきが高く、美しい。

紀半ばから十二世紀の末にかけて、藤原清衡、基衡、秀衡の三代がここに宮内だ榮耀の面影と、秀衡を迎えられてここに安堵したのも東の間、秀衡の嫡男泰衡に裏切られて衣川に自害して果てねばならなかった源義経の悲劇などが、それらを想いやる芭蕉の感慨ともども、夢まぼろしのように、しかししたやかに、浮かびあがってくる。

芭蕉は義経の館があったと伝えられる小山、高館に登ってこの地一帯を眺望した。この眺望の記述が、旧武士芭蕉にふさわしくまことに的確にこの地の地形をとらえ、それがそのまま歴史への回顧に重なっていつて、みことだ。南部領から滔々として南下してくる北上川。ただ一人義経に忠誠を尽した秀衡の三男、和泉三郎忠衡の居城の跡をめぐって流れてきてこの高館の下で北上川に合流する衣川。衣が関の北にあって蝦夷への防線となっていたらしい泰衡らの居城の跡と眺めわたってきた後に、「扱も義臣すづつて此城に籠り」と再び高館に回帰する。

そして杜甫の名篇「春望」の「国破れて山河在り。城春ニシテ草木深シ」との悲嘆の起承句を想いおこしながら、草むらに涙しつよまれた「夏草や」の鎮魂の一句「散文から漢詩として俳諧へと急転し、飛躍して終結する息のリズムがけすばらしい。芭蕉の生涯最後の句「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」の「夢」と同じく、往年の武士どもの夢がいまなお夏草の草原の間にこだまし、夏草とともに人の世もろくろ流転することを伝えているかに感じられてくるではないか。

おくのほそ道



芳賀徹さんとたずねる

伝統とは「継続すること」

「御格子まゐる」――高校の授業で習った『香炉峰の雪』の一文を、実際に大学生になり京都御所で

古典と私

体感した。京都には、古典の文章にひそんでいる情景が目の前にフッと現れることに感動した。それ以来、京の街を歩

村井杏侑美さん



村井杏侑美さん

「今も生きているもの」であり、その一つひとつに出会うのが楽しかった。実際に現在、上方舞

を習っているが、完成された型の中に、受け継がれてきた想いが流れているのを体感できる。「古典」があらわれてくる京都の顔の一つに学生と街という一面もある。私は京都学生祭典の実行委員として京都の多くの魅力に触れてきた。そして祭典が「伝統祭」になることを目指して活動する中で、「伝統とは何か」を繰返し考えた。私なりに答えは「継続すること」

である。さまざま人の想いがそれを継続させ、支え、長い年月を経た時に伝統となる。京都はいろいろな事象を、そうやって育ててきたため、古典と呼ばれるものが今なお街中に息づいているのではないだろうか。来年もまた秋になったら京都学生祭典が開催される予定だ。伝統が生まれ、育っていく過程に多くの方にこだわっていた



古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は11月1日を「古典の日」と定めた。



京都市南区の児童公園にある「羅城門遺址」の石碑

夜の、鐘も聞こゆる暁に、東寺の前をうち過ぎて、九条おもてにうつて出で、羅生門を見渡せば、物凄しく雨落ちて」と語られています。門の崩壊後500年をへて作られたものですが、この門と鬼の物語は能や民俗芸能として長く今日にいたるまで演じられ、人々に愛され続けています。この地に立って、かつてあった巨大な門を想像すると、その楼上の鬼に挨拶したいような気持ちにもなるのです。(NPO法人・都草 百瀬明美)

時空を超えて語り継がれる「羅城門」

親しむ

DNP デジタル再製画 伝匠美

文化財を多くの人に、そして子孫のために。

伝匠美は、DNPが「文化財の保存と次世代への継承」を目的に開発した技術です。

DNPの最先端技術によって、障壁画・屏風・掛軸の紙本墨画・金地着色、杉戸絵・天井画・絵馬の板絵着色など、すべての日本画を耐久性に優れた高精細な再現が可能になりました。

伝匠美のもう一つの大きな意義は、文化財を原寸大に再現できる精緻なデジタルデータを子孫に伝承できることです。

お問い合わせ
株式会社DNPメディアクリエイト関西 匠プロジェクト
大阪市西区南堀江1-17-28 TEL06-6110-3081
伝匠美 http://www.dnp.co.jp/denshoubi/



奇想の画家として知られる長沢芦雪の「虎図」で有名な串本無量寺、別名「芦雪寺」とも呼ばれている。江戸中期の画家 応挙と芦雪による国指定重要文化財の障壁画55面があります。

監修 美術史家 辻惟雄

串本無量寺方丈デジタル再製画、今年10月完成。約100年ぶりに、円山応挙、長沢芦雪の師弟が意図した絵画空間が蘇りました。

和歌山県串本町串本833 無量寺 0735-62-0468 応挙芦雪館 0735-62-6670